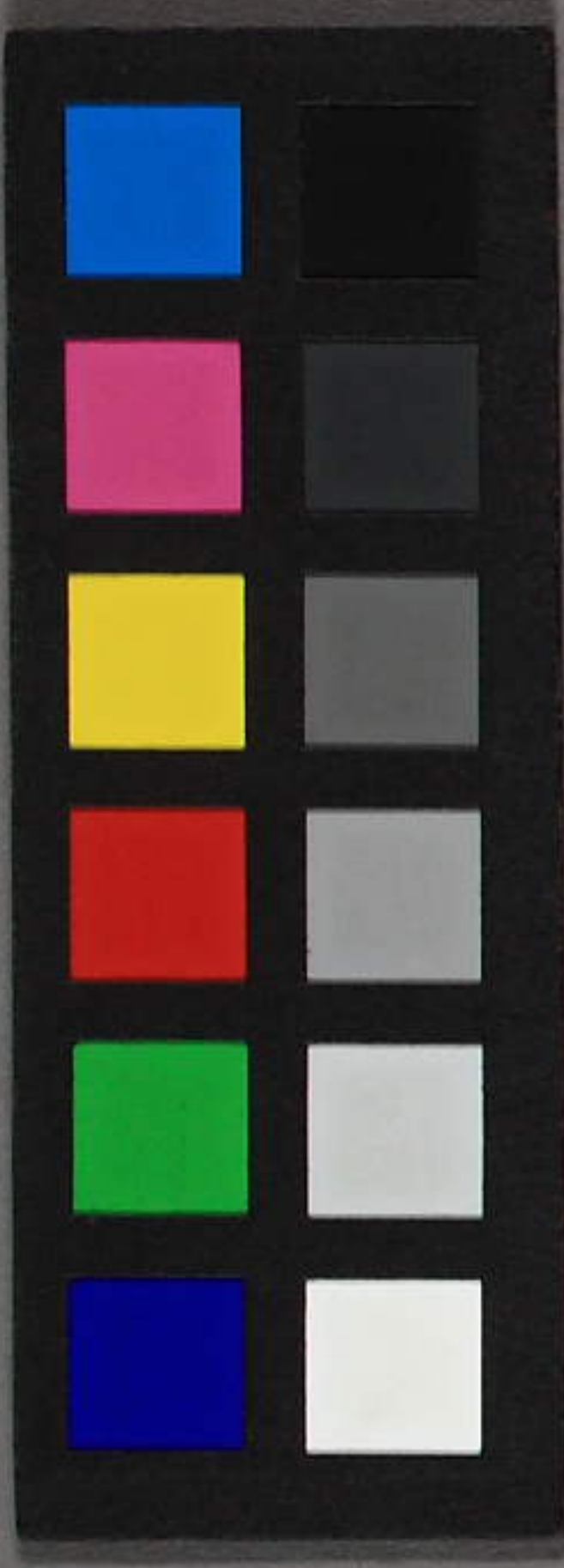


白
楊

作子艷岩白
序綱信木佐佐
幀裝馬生島有



白

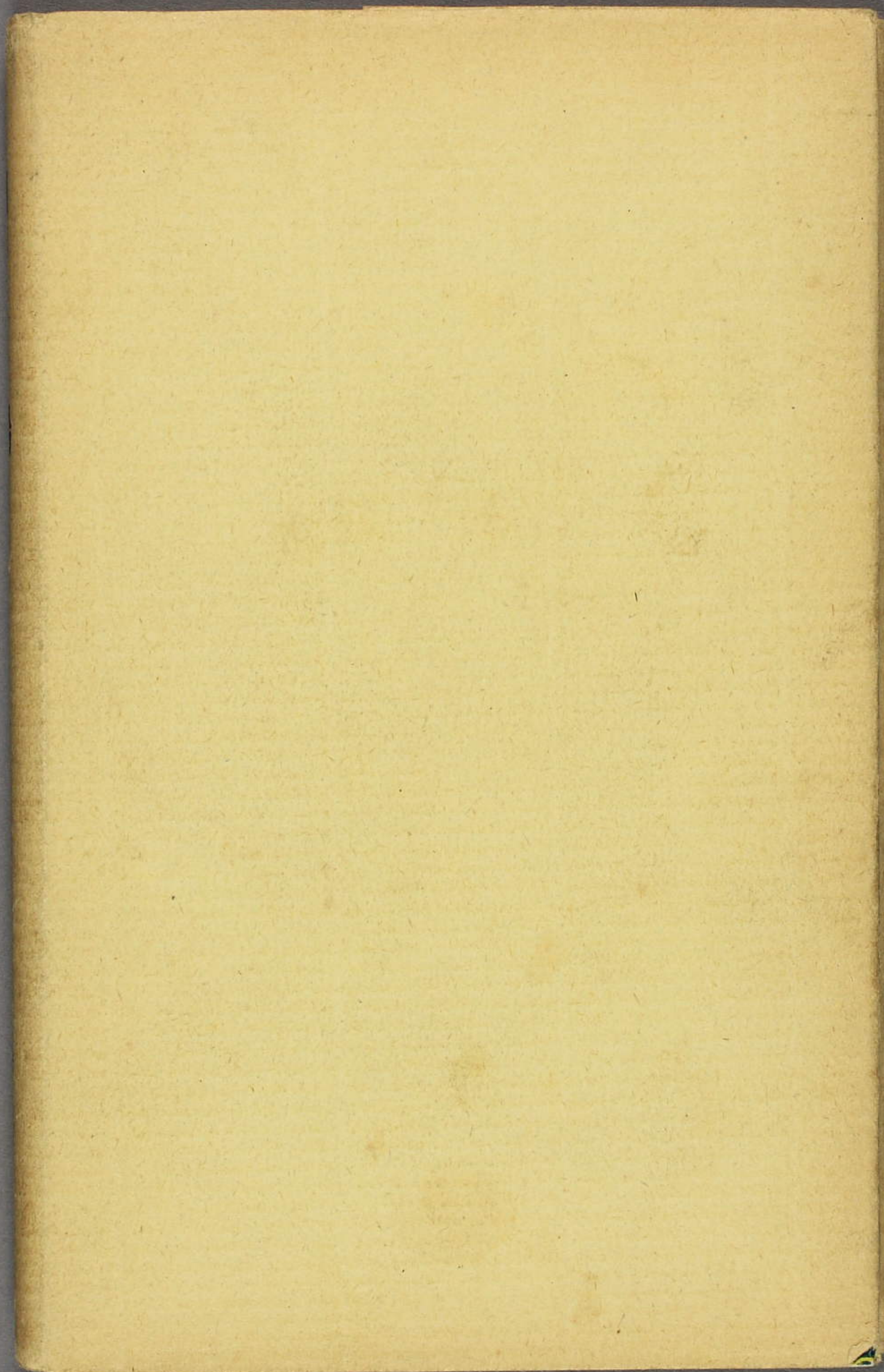
楊

白

岩

艷

子



白
楊

白 岩 艷 子 作
佐 佐 木 信 綱 序
有 島 生 馬 裝 幀

白
楊

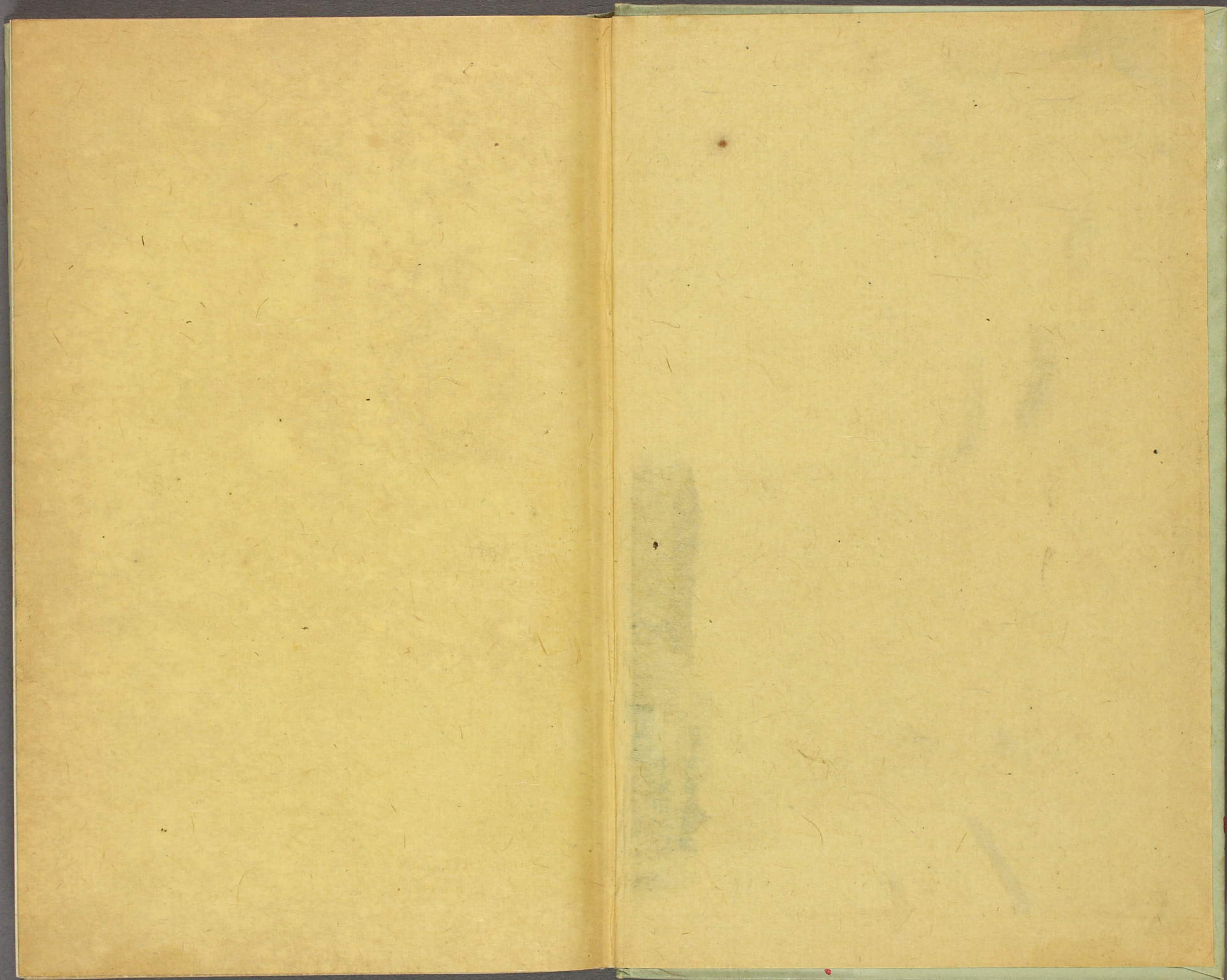
白
岩
艷
子











心の華叢書

憶良が三津の濱松の歌、天の原ふりさけみし仲麿の歌は、ともにかの地にありてわが國を去のびしにすぎず。寧樂朝の盛時支那にわたりし文人數おほかれど、支那の風物をうたひし人は、殆ど無しといひつべし。平安朝以後にいたりては、わたりし人も少く、かつ漢文學の影響こそは歌の上に多く現はれ來ぬといへども、親しく支那の風物を詠じ、もしくは眞に支那趣味を消化してうたへりし人の、之を求むべからざるは同じ。ましてからぶり

を斥くるを以て専らとせし多くの徳川時代の歌人にいた
りては、いよゝゝまかり。ここに於いて、わが白岩艶子
ぬしは、歌人として、殊に女歌人として、またく獨特の
地歩を占め得たりといふべし。

ぬしの夫君は、支那に事業を經營して年久しく、その
ために、ぬしもまたかの地に往來すること十數回、その
人情風俗にくはしく、また名山大川にあそび、うつくし
き詩想を折折の詠にもりて、その數已におほし。さきに

明治四十三年の春、采風一卷をものして、その一端を世
に公けにせられしが、こたびまた近業數百首を集めて、
この編なりぬ。即ちかの地に於ける集、鷗鵠を主として、
そふるに本國に於ける作、町ずみ、海そひ等を以てす。
この歌集が、古へ今はもとより、永くわが文壇の異彩な
らむことは、何人かうたがふべき。

夫君がかの地に於ける事業は、東亞の交通史上に永久
に紀念せらるべし。而してぬしがこの歌集にいたりては、

その夫君がををしき事業の大路をかざる美しき花にや似
たらむ。夫君が事業のいさをの消えせざるとともに、ぬ
しが作もまた、とこしへに残らむ。而して、ぬしもとよ
り春秋に富めり。さらに第三の歌集の成らむことは、希
望にたへざるなり。

大正五年四月

文學博士 佐佐木信綱

白 楊

白 岩 艶 子

鶇
鶇

水の都あしの花ちる江南にいくさの雲
のゆききあらすな

かもめ飛ぶ濃青の空に巨船おほぶねの煙ゆたけ
き朝びらきかな

紫の霞わけこしおほふねや浮標うきぶしうちゆ
らぐ汐早き門司

いかり巻く音からからと心地よしこの
夕なぎに船出すわれは

吳淞ウソンに夜あけにつけば大陸は霧のうす
ものかけて眠れり

高くひくく窓のがらすにうつる波かも
めのむれも折折は過ぐ

船室に二日こもりてふみ讀みて水のお
もても知らでこしわれ

この國の友とかたるに友もわれも事あ
りぬべき憂ひをいはず

楊ちるみちを大馬路^{ダバロ}へそのかみのわが
足あともふみてゆかまし

うた聲も近き四馬路^{スマ}の扇屋^マに地紙折る
子の眉うつくしき

紅蠟の火影^ハにゑめる人うつくしみだれ
たる世のおもかげもなく

旅人の夢もなつかしさをめて見る菊の枕
の紅のふさ

南ゆき北ゆく雲のたゆたひに暗き世の
民光をまてり

ますらをは馬の蹄の音にさへ心をどる
と聞きしものゆゑ

あはれなり革命の兒よ汝がつくる新天^{にひあめ}
地^{つち}のいけにへの人

桑とる子汝が思ふ人の消息はありやと
問ふもはばかりる世なり

つかさ人奏しまつりぬ龍の化石蜀の南
にいづる御代ぞと

廊の戸に梨の花ちる宵なりきとはの別
を君と泣きしか

黒髪のかざりの玉を打くだきたふれし
夫つまの企をつぐ

戀ならばかなしからまし若き血のもえ
ては消ゆる革命の人

みどりこき翡翠の耳輪耳もとにすずし
く鳴りぬ戀のささやき

汝が爲に思ひとまりて埋もれむ彼の企
に洩れにしわが名

かたれども想ひは盡きずわが爲に蠟涙
こりて夜もふけぬらし

里の門のにいくさ遁れし人のむれ賣よ笛え兒の
呼びて笛かひてふく

爆竹のひびきに似たるつつの音いくさ
と聞きてよろひ戸たてぬ

機器局のあたりにあがるのろし二つ今
宵いくさの雲そらに湧く

おそろしきつつの響も夜毎なれば月あ
かりにて女も見けり

後の世は繪巻物なりいくさ人桃さく春
に旗あげはせよ

水牛に乗れるうなるは革命も何もおも
はず篠笛ふきて

とこしへに聖者生れず泗水かれ尼山に
いのる人もあらなく

河添の町の火影もうらさびし姑蘇のと

まりの夕ぐれの雨 (蘇州)

東門に畫がける子胥のひとみにも春の
日ざしは花やかにさす

まぼろしの西施に逢てものがたる春は
たそがれ吳にいりし人

茉莉花の花の香満ちて人もなし廊のあ
かりもつかぬ宵暗

民船みんせんの小窓うつ雨まめじめと秋のほり
河水ゆたかにて

ひしとると翁がよする小舟にもおどろ
かぬまで馴れし水鳥

水鳥の浮ぶ西湖のみをつくしほのほの
匂ふあけぼのの色 (杭州)

梨の花ちりかふ廊のまる柱思ひにやせ
し身をよせてたつ

荷花の露硯にうけて御經をうつしてお
はす舟の貴人

いにしへは御遊の舟も繋ぎけむ柳にけ
ぶる春の朝雨

驢の鈴に小鳥おどろきむれたちぬあざ
み花咲く野のつ道

法の山いま靈隱は夏木立巖いはの諸佛しよぶつにみ
どりかげさす

朝風にかをるはちすをわけ行きて丹塗にぬり
の小舟水門くぐる

みかど今月に御舟をよそはすと燈籠な
がす西のきざはし

普陀山や妙莊嚴路わがゆけば心あらへ
と法の雨ふる

錢塘江牛車の渡しみちたえて遠なりよ
する高潮の音

煬天子いでます道の柳かげ江都の春の

千三百里 (揚州)

樓門のあかりは遠し誰が召すと香車ゆ
かしむ春の夜の月

迷樓に青蛾の御史の御とのる燭のまた
たきうつくしき夜を

幾春かみゆきをまちし隋堤の柳は老い
て雨にむせべり

夢のごと睡蓮浮ぶ廻廊のおばしまによ
りもの思ふ子よ

燈火の水に流るるかげもよし絃歌にふ
けし水樓の欄

あけがたの雲も匂へり曲廊に立ちてな
がむる睡蓮の花

馬なやむ雨あがり道醜男ぶとこの明の太祖の
御似がほかな（南京）

水あふれあしの穂白き秋に訪へ支那の

南は澤の國なり（長江）

月なくて大江の夕べ船にあるは花なき
春のなげきに似たり

たまさかに大江をのぼる詩人うたのながめ
を添へよ香爐峰の雪

百千羽の雁のむれたつ江上に夕雲なび
き木ぼり舟浮く

岸遠のき濁水、雲のただなかをゆたに流
れて大舟を呑む

空ひたす大江の流一千里日の大御旗た
ててゆく船

河波のゆるやかなればめづらしう頬に
紅して髪くしけづる

この大江かつてのぼりし春よ昔其頃人
もうら若かりき

春なれば舟路なればと桃色の衣きるほ
どの若さにもがも

船人ら冬の大江のかはる洲に夜ただ眠
らで水先まもる

をみなわが旅のたもとのうすじめり詩^{うた}
がたりきく潯陽のよる (九江)

名に高き峰の白雪ほのぼのとあけゆく
朝の遺愛寺の鐘

水にうつる舟のあかりにいにしへの四
の緒琴の音をなつかしむ

江上にわれもむすばむ月の影昔の人の
詩^{うた}あらずとも

山かごをいこはせて聞く遺愛寺のかね
の響に桂花ちる

家鴨かふ裾野の村の草屋にも廬山おろ
しのさむき夕ぐれ

見さくれば廬山の峰に雪のこる沙河の
あたりの野はみどりして

ぬまにつづく黄老門の松林雉子のなく
音も折折はする

たまたまに來し詩人の目にのこる廬山
は春のうす雪匂ふ

豚遊みのとぶぬまの春日や塞湖サイホのをちの廬山
に霞たなびく

うらうらと春の霞ぞたちこむる山ふと
ころの天池寺の塔

春の水ゆたに流れぬ修江の楊柳津を君
と渡れば

鰻魚けちつる舟みなかみに河下は橋の工事
のつるはしの音

とまり船荷やくの聲も河波も枕に近き
よもすがらなり

赤壁の船のとまりや遠方とちの雪の廬山かたの
かげもおちくる

願はくは秋の夕べを詩うたおもはむ黄鶴樓
のおばしまにより（漢口）

船よせてとぶらひまつる君山くんざんの竹の涙
の小雨そそぐ日（洞庭）

水樓に名月賞す湘君祠九疑の山も霧の
あなたに

岸近く山のみどりも手にとらばとらる
るばかりすれすれにゆく

水にちりし花のゆくへの便りもと鯉魚
割きて見ばやおぼる夜の月

聲高う水夫尋^{ひみ}よむ船ばたに夕月匂ふ洞
庭の春

石と化してまばしねむれり硝洞に蛟龍
雲を得ぬ人の爲

水にちりし花に船路をたづね來ぬ武陵
の郷の春のあけほの (湖南)

うた思へばうき事すべて忘らるる旅の
やつれのあぢきなさなど

三千里旅の憂ひも知らざりき河舟ゆた
に君と來し春

大君の民の一人ぞかるがると物ないひ

そよ異國にして(滬上)

ぬひわくによりて半日銀糸して眞萩が

もとの觀世水みづぬふ

世の中の事を皆わが背景となして舞ふ

べき舞の手もがも

筆とりて春の日永をあかずぬ蘭のよ

き香のただよふ室に

春の日の心ゆるびに忘れたる乳母のか
ほなど思ひたどりぬ

人のおきておごそかに過ぐ神のよのあ
まねき春の花をめづるに

旅に十日やみて暮らせばふるさとの便
まちわび泣かれぬるかな

春まだきふりじや匂ふ頃なりき去年も
別れぬこの年もまた

わたいれのかたのよごれの日だつまで
のどかになりし春二三日

春の女神うれしき時に染めまししあけ
ほの色花のくれなる

旅人の夢もやすしとふるさとへ歌など
かいて文送る宵

姉にあひし夢ふとさめてわが指のほそ
りながむる夜半のともし火

とまり船夕汐させばさざめきてかい漕
ぎのぼり棹さしくだる

あかりつけば江上彼岸一様にまちのに
ぎはひひろごりて行く

愚園ヲイエンに木蓮咲けば半日を曲廊めぐり太
湖石見る

新らしき女もまじり白楊の並木の道を
くるまつらねて

春雨のけふるあしたの柳かげぬれて花
よぶけはひ濃き人

たち舞へる花旦はなたんのゑみにくらべたき此
一本の海棠の花

透垣すいがいのうちをゆかしみ立ちて見る梢た
わわに咲ける海棠

榻たぶにより茉莉花つなぐをとめ子の髪よ
りたつか初夏の風

なつかしき把子路バシロの通り二年を母と住
みにし白藤の家

徐家セウカ滙路ヰロ馬行く道の一すぢをのこして
廣きすすき野の原

虞美人の生れしさとは今いづこ野には
靈なるひなげしもなし

駿馬あり車百輛招牌の飛龍の文字の筆
のいきほひ

官醬の文字暮れのこる片田舎家路をさ
して水牛かへる

夕されば小籠をさげて絡繹と工女のむ
れがたどる野の道

大かたはくろき衣着る女らの髪に匂へ
り茉莉花の櫛

當と書す壁のひなたにくみ紐の店ひら
きをり人はねむりて

栗やきは今も栗やく河南路や天后宮の
橋のたもとに

まるまると白くいねたる小羊にもはの食
ます子のうすき袂よ

一はちの水仙かをる店先にたちてもと
むる涙竹の筆

畑中の楊の森の一つ家軒より高く日ま
はり咲けり

靜安寺ひさしの彫刻畫たそがれて野末
にあがき夕やけの雲

砥の如くはてしなき道野の末のすすき
に落つる夕づく日かな

わが爲に夕日が丘と名をかへよ薄志げ
れる野邊のおくつき

つちの底に眠れる人のたましひもさめ
てめづべきこの夕づく日

西瓜ウリのたねかみては捨ててあつもの
かはる間まばし聞く胡弓かな

さかしまに紅蠟燭をかけ並べ金紙銀紙
の元寶ゲンポウうる家

夕されば人あと絶えし田舎道子豚なく
にもおどろかれぬる

うすものにつつまれて乗る花轎ハナコ子の鏡
にうつる桃色のきぬ

嫁ぎ行くからくれなゐの花轎子こしや魂たまな
きからと人は知らずて

もちひ賣る翁がたたく竹の音もさびし
うふけし永安里かな

すずなりのたちばなの鉢店先に今も昔
の玉ひさぐ家

この古び誰が三十年とせの料どともとはま
く欲しき一狐裘かな

年の瀬と足を空なるゆきかひや丹塗にりの
桶を荷ひもちつつ

たちばなは鉢の木ながら供へけり紅蠟
つけて謝年しやねんする宵

ゆく年のせはしさ知らぬ旅人の袂にか
をる臘梅の花

酒甕の酒とくめさせ梅咲きぬ花なげい
れのうつはにもがも

事あらむ國のおそれのなししわざ十五
のをとめくるき衣着る

人の世の女に同じさがなるや蠟の涙の
もだしては落つ

年年に春はかへれど宮苑におとるへは
てし清の代の人

乗りすてし轎子かのながえのなみたてる
東轅門の晝さがりかな

風帽にかくすとすれど長髪のこぼるる
は誰そ世を志のぶ人

清人の錦の袍も玉つづる華冠はなかうぶりもとほき
世のいろ

女等は蓮歩ゆるらにそのかみの華やか
なりし身を志のばずや

柳の枝折りて送らむかしまだち別れ惜
しむに詩うたのあらねば

朧夜をふけて洩れくるうた聲や舞臺に
たつは夏月珊かも

筆とりて一日あるをもゆるさるる旅は
女にうれしき時ぞ

いつか又來むとおもへばつまづきし道
の小石も親しまれけり

われに似し人もし行かばことづてよ立
ちならしつつめでし梢と

一枝の梅参らすと添へし文赤き詩牋に
かけばふさはし

香木の扇の骨のかをる風志づかに送り
ゑみつつありき

さみどりの野をながむれば旅にいでて
過ぎし日數おどろかれける

われは鷓鴣しよこまたも南へこころざす十年とせ
旅寐のをかしき宿世

町住

宵暗にほたるも飛ばず家多きこの町ず
みは五月ものうし

花がめにあやめいけさせ窓かけを眞白
にかふる五月晴かな

かば色の手巾しゆきんのはしのかがり糸淺黄な
るさへめづらしかりき

思ふこと大かたいはでならひこし身は
人づまのつつましき名に

外^とのかたは人うまくるま一重なる垣の
うちこそ深山さびすれ

餘生なりばらの花など見てゆかむばら
のとげにもさされてゆかむ

かさかさと手のあれおほえ綿いれの志
にくくなれば初冬が來ぬ

身にあまる憂ひをかくす人めきて去づ
かにかをる水仙の花

庭の石ぬれたる上に月影が畫かく山茶
花南天の枝

江南の春におもひをはせながら今年も
病めりふるさとにして

洞庭湖水陸洲と心ゆく人のことばに耳
かたむくる

とどめおきし二日ばかりのまたしみに
はなすは惜しくなりぬ猫の子

今いくとせかくてあらむとふとさめて
まろくいねたる猫をいたはる

こでまりに紅ばら添へて活けて見つさ
て客人よ誰かは來ませ

紅^{べに}うすきよわよわしさも花のさが名よ
ことごとしこの金蓮花

一本の古梅に春はただよひて小鳥聲よ

き山莊の朝

自らをかるしむるなかれ大君の御民の
數の一人ならずや

父とよびて答へますべき國あらば海の
はてにもゆかむとぞ思ふ

楚楚として白き芙蓉のおもかげとあふ
ぎし人のまさぬ秋なり

紅のほけの花咲く春さむや鶯きなく玉
川のさと

雨にじむこの朝あけのよき心地よき便たより
あれ旅のわが夫せの

春の日永洗ひはりするうら庭にやぶ鶯
が今日も来てなく

小さなる島の王者に春たまへひひなの
壇に桃匂ふごと

桃日和都をとめが三越にひひな見にゆ
く袖ふりはへて

雨後の空すみたる宵によしと見る若葉
の庭のむらさきの瓦斯

日はあまりうららかにすぐ紙燭して見
たしとぞ思ふ緋牡丹の花

海 添

網糸の麻よる音ものどかなりいその小

道の春の終日ひねもよ

うつくしき人にてをあらむ雨の宵小傘
かたむけ磯にたつわれ

志をにの葉まださはりてもこはからず
かんなにまじり廣う茂れり

時間をいとま申してかへり行く姿う

つくし卯の花の道

やどかりは名のさびしかり磯草のなか
にていきはいけるものから

すずしさは麻の衣を着るおもひ若葉を

渡る風のるゐなり

天地の秋のまらべかよる浪の音にまぎ

れず鈴虫の聲

虫の音のあまりに細き雨の夜をますら
をさびてよする浪かな

はてもなくものぞかなしき一人ゐてふ
けて聞く夜の遠をちの潮鳴

ことしまた芽をふくを見て涙おつ亡き
弟が手植のかんな

天上の樂にさそはれふとゆきし靈か歸
らず待ちくらせども

汝がゆきし百合さく頃の雨じめりわが
涙さへふりそふものを

花やかに日てり草咲く初秋やとざせる
家の庭に門邊に

遠き國に月見草みて泣く吾子よ淡きえ
にしや母とふわが名

野分して志をに折れ伏すうら庭のそこ
ろせきにもよき月の影

潮の音は遠くきこえつ軒端にはまただ
る雨のまづけき夜かな

須磨の卷明石の卷をよみふける机に匂

ふ黄水仙の花

涙

女とて御國をおもふ時もあり戀ばかり
には涙せぬもの

城の崎に病む人おもひはたちなるわが
黒髪に花もなかりし

あまりにも思ひ出多きこしかたの涙の
道をかへり見るかな

泣きつくし今は涙のなきわれに世のつ
ねのごと吹きぬ秋風

世の憂ひ知らぬさまにてほほゑめるわ
れを罪せよいつはりの罪

めづらしき身の運命さたまをもよの常の人め
きてあり人めかしあり

思ひたまへいくばくもなきわが命女は
老を死ぬといふなり

うつくしうてあらば足たるべし春に咲き
春にちり行く花のたぐひぞ

うき事のさは數數もそふべしや正しき
道をふみて來し身に

ものうしや涙とふ文字くるしくもいつ
の世よりか女にそひし

きぬ糸は細くうつくし大綱のあらあら
しきもわれはにくまず

くろかみに白きがまじるよはひまで命
たまふなわれは女ぞ

いのちある草木をうゑよ亡き後も志る
しの石はあまりつめたし

若かりし頃のうれひにくたびれてもの
皆わびしいねてくらさむ

憂ひには盡きぬ涙よ折折はもの忘れす
る人にならばや

たどりゆく道のゆくては神の國わが足
あとよあきらかにあれ

世の中をのがれはてむの想ひよりさめ
て又見る白萩の花

いくばくもあらぬこの世に何しかも憂
ひをうれひ人を戀ふらむ

死にいたる道一時のついでなりやすら
に寐まし花も見てまし

よろこび

君あれば世にさびしらのかげもなし身
に春さらずとこをとめにて

相見てのうれしさにしも劣らじとやさ
しき君が文に泣く夜や

なき父の御^{たま}ゑがほふと思ふ時心のくも
り晴れわたるかな

何せむといひし眞玉も身にそへばうれ
しと思ふ女のころ

くもりなき明月に似し半生のこのよる
こびを告げばや神に

こちよきうすくれなるのよき玉の珊
瑚に似たる君がやさしみ

神ながら君志ろしめす日の本の花の女
と生れつること

うらうらと春の光にあたたかう人にお
もはれ二十年は経ぬ

春よ春よ今年はうれしよるこびの身に
も家にも満ちたらひたり

京

千どりなく四條河原の夜をさむみ千ど
りが鳴けば人の戀しき

清水の音羽の瀧のほそぼそと世にふる
わが身涙つきせず

さみだれに青葉色よき東山京にひるね
の夢の志づけさ

ほのほのと夜あけ空すみ京に入るさい
はひ人に朝日まづさせ

いそがしき十とせ二十とせに珍らしう
此のどかなる二三日かな

つゆばれの日ざし華やかにかがやけり
敕使御門の扉の金きんに

山莊の桐のひろ葉に雨そそぐ七月十日
禪話ききをれば

つゆばれを凌^{のう}霄^{せん}花^{かつら}ぬれて落つる平等院
のひるまづかなり

閑谷

父上のひざにいだかれ山にいりし五つ
の年の思ひ出の家

一千株父が手植の梅匂ふ御教うけし人
は世にいでて

122

弟らに枝志をらせてとりし李白く花咲
く閑谷しんたにの春

今とへば紅葉がはなのまがりかど霧鬱
たりし山明るみぬ

123

講堂のなかのけやきのまる柱まとかな
れよと教へ給ひき

聖廟の御像につかへ半生を山ごもりし
て梅めでし父

華甲齋父が手なれの筆硯ただ泣かれけ
りうつしゑのまへ

道ときて二十とせ父が山住のさびしき
さまに馴れしわがどち

くひな鳴く夕べを父と山川に卯の花を
りに行きにし昔

閑谷のこの山窓にこもり居て朝よひ國
を憂へたまひし

はらひのけ行くべき道に進みゆけ世人
に心とらはるなとぞ

山ゆりの花ところどころ初夏はほとと
ぎすきく閑谷の里

白
楊
終

大正五年四月十三日印刷
大正五年四月十六日發行

正價 金七拾錢

著 者 白 岩 艶 子

印 刷 所 民 友 社
東京市京橋區日吉町十番地

發 行 所 竹 柏 會 出 版 部
東京市日本橋區本町一丁目一番地

心の華

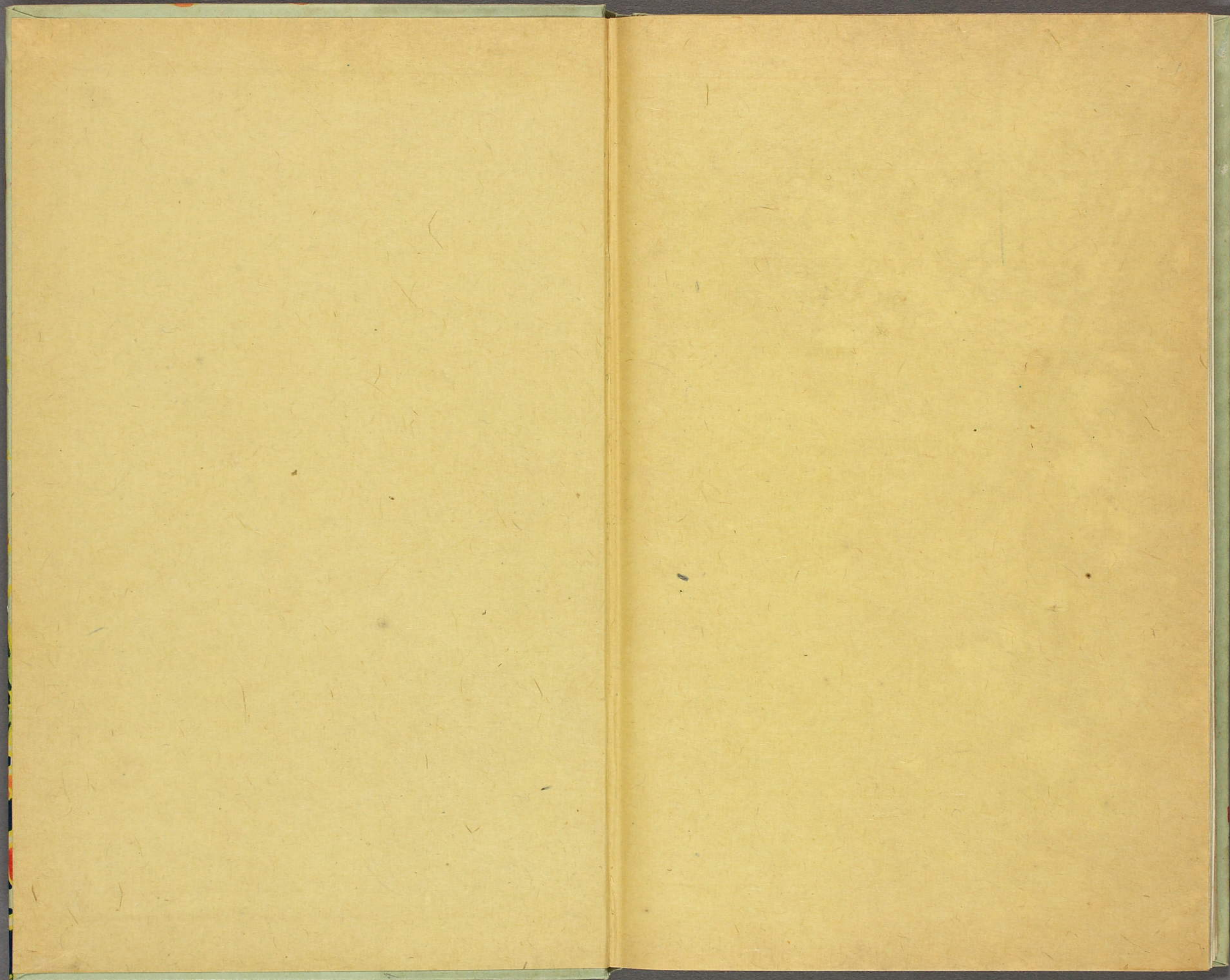
「心の華」は、和歌を中心とせる月刊文藝雑誌にして、文學博士佐佐木信綱氏を主幹とし、石榑千亦氏を主筆とす。和歌革新の運動おこりてより二十年、新派歌壇の機關として世に出でつる雑誌幾許といふを知らず。まかもその操守一貫、歌壇の激流に楫とり、進運に棹さして、益々その面目を發揮し、その理想の國に近づかむとするものは、實にわが「心の華」なり。新しき詩歌に志す人の爲に、教養の根據となり、研究の指針たるものは、今の文壇、本誌をおきて他に見ること難からむ。

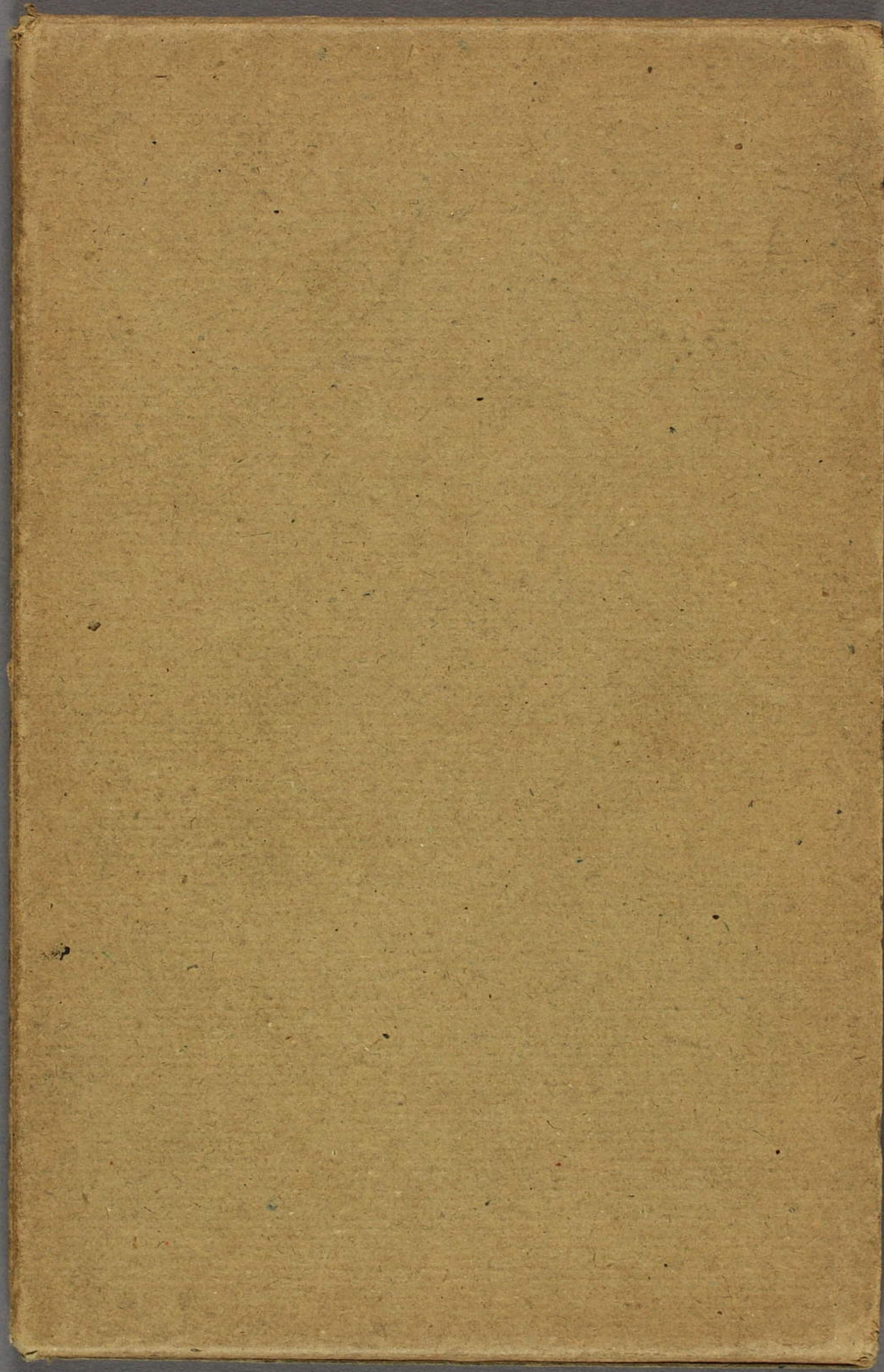
心の華叢書

吾等同人、世に衒耀せず、また呼號せず、竹柏の園生に集うて、靜かに研鑽を累み來れること多年。ここに志あるもの相謀りて、自今「心の華叢書」の名のもとに、廣くその作品を發表せむとす。特に各自が歌風の個人的特色の發揮を旨とするところより、各編單獨の家集となし、以て往年刊行せし「竹柏園集」、「あけぼの」、「玉琴」等の例と異ならしむ。而して稿成りしものより、先づ之を刊行す。敢て世の眞に詩歌を愛して、驪珠を海藻のかげに探り、琪花を樹下に求むるの勞を惜まざらむ人に薦む。

心の華叢書已刊目次

藤むすめ	松本初子著	大正三年十二月刊
潮鳴	石博千亦著	大正四年二月刊
蹈繪	白蓮著	大正四年三月刊
移岳集	三浦守治著	大正四年六月刊
塔	西郷春子著	大正四年七月刊
翡翠	片山廣子著	大正五年三月刊
白楊	白岩艶子著	大正五年四月刊





白

楊

白

岩

艷

子

